スペイン語教育とベトナム語教育

高垣敏博

1. 国家大学スペイン語部門訪問
2. スペイン語教育からみたベトナム語教育

1. 国家大学スペイン語部門訪問

2 月 28 日午後、ホーチミン市国家大学社会科学人文大学スペイン語文部門（Vietnam National University: Ho Chi Minh City University of Socail Sciences and Humanities Department of Spanish Linguistics and Lierature）を訪問する。ホーチミン市の南にある国家大学の大学名は正式には「ホーチミン市国家大学」で、さらに「社会科学人文大学」と続く。大学はいくつかあって成り立ちや専門は違うが、複合的に一つの国立大学を構成している。言語などを扱っているのが「社会科学人文大学」で、その中にスペイン語セクションがある。

スペイン語部門長のチャン・カオ・ボイ・ゴック（Tran Cao Boi Ngoc）先生、スペイン語専任講師レ・ティ・カム・トゥイ（Le Thi Cam Thuy）先生、またベトナム文学のチャン・ティ・ミン・ヨイ副学部長と面談させていただいた。

写真 1　国家大学訪問

スペイン語のセクションは「スペイン語学文学部門」と呼ばれる。フランス語・英語は「学部 Faculty」として昇格しているが、スペイン語はまだそれにいたらない部門 Department であるようだ。スペイン語は全国でこの国家大学（スペイン言語・文学部門）とハノイ外国語大学の

2 か所だけで教えられる。スペイン語部門は 2008 年創設で、3 年間の間に各学年 50 人ずつ 150 人を受け入れている。1、2 年はスペイン語基礎、3 年から文化を学ぶ。言語文学以外では歴史・地理などを扱い、学習の対象はスペイン語圏全般である。また専門的研究というよりはまんべんなくという姿勢である。

具体的に授業は 45 分×8 コマで、日本の 4 コマ分に相当。3 レベルにまで達しているがまだ達成度について評価するほどではないとのこと。教員は 2 人で、サラマンカ大学でスペイン語教育法のマスターを取得している。さらにネイティブ教員としてスペイン人 2、アルゼンチン 1、パナマ人 1、プエルトリコ人 1 が加わる構成となっている。

評価基準については、当面 A1、A2、B1 の 3 レベルしかないので、評価を科学的に行えるところにまでには至っていない。北のハノイではスペイン語が 11 年前に創設され、歴史という意味では先行している。スペインの検定試験である DELE を受験させている。写真はスペイン語の研究室と職員室、さらに掲示板には「DELE」というスペイン語検定試験のポスターがあり、上級レベルの C1 の文字が見える。

写真 2　スペイン語教員室

スペイン外務・国際協力省からの援助で図書資料室が設けられている。基本的な辞書やマニュアル類は揃っているものの、まだ教育の初歩的段階にある印象を与える。

スペイン語教員室の近くにはベトナム学科、日本学科の職員室がある。また大学共通の「外国語教育センター」があり、英、独、仏、ロシア、中国、日本、スペイン語、ベトナム語の 8 つの言語のうちの 1 つとしてスペイン語もそこで教えられている。社会人にも開放されており、専門を終えた学生も履修できるという。

写真 3　スペイン語の先生方と（左）／　図書資料室（右）

2. スペイン語教育からみたベトナム語教育

スペイン語における評価基準についてふれておきたい。スペインでは、「ヨーロッパ言語参照枠（Marco común europeo de referencia para las lenguas）」が言語教育の基本となっている。その普及の中心は国営「セルバンテス文化センター（Instituto Cervantes）」にある。念願だった日本にも、数年前四谷にセルバンテス文化センター東京ができ、言語・文化の活発な活動を展開している。

参照枠をスペイン語教育にあてはめるために『CEFR に基づいた教授基準』(Plan Curricular) がセルバンテス文化センターにより大部な 3 巻本にまとめられている。文法や表現法、音声ありで、それぞれ A から始まって 6 レベルに分けて細かく分類されている。

写真 4　『CEFR に基づいた教授標準（セルバンテス文化センター）』（左）
モレノ先生の文法テキスト（右）

東京外国語大学の特任外国人教員 Concha Moreno 先生はスペインの大学院マスターコースでスペイン語教育に携わる人たちを対象に教鞭をとるスペイン語教育の専門家だが、これまで多くのテキストを作っておられる。最近出版されたスペイン語文法テキスト 3 巻本を見ると、A1ーA2、B1、B2 分けられている。編纂に際してはやはり、CEFR の参照枠や上述の Plan Curricular を基準にした文法にしたがって練習するように工夫されているという。会話の本にしても、まず学習者本人が自らを語るのに必要なシチュエーションから始め、次第に社会についての話題にまで発展していけるような構成にし、文法は後から流し込むとのこと。このようにスペインにおけるスペイン語教育と評価基準はある程度システム化されており、わが国にスペイン語教育現場および評価基準策定もいまこの流れを追っている段階である。ベトナムにおけるベトナム語の教育現場および評価基準も段階別のシステムに従っているようであるが、いまここでヨーロッパ言語参照枠が直ちにベトナム語のような言語の教育･評価の基準になるものだろうか。そのヒントを求め、ベトナム語を学ぶ大学院生に生の声を聞くべく面談をムイネーにて行なった。

APU で学部を終え、現在ベトナム国家大学で修士課程に所属、ベトナムの都市交通システムについて研究している大学院生赤石浩紀氏にこのような実態調査に応じてもらうことができた。聞き取り調査は赤石氏に対し指導教官の田原洋樹氏および高垣が行った。

赤石氏は苦労の末、C のレベルを達成して大学院の授業を受けられるようになった方だが、いろいろお聞きするうちに、自ら実践してきたベトナム語習得に関して話を聞く中で、大きく 2 つぐらいのポイントが明らかになってきた。

まず、西洋語では A1、A2、B1、B2 と段階的に勉強を進め、1 年で一通り文法の骨格を終えてその後次第に肉付けしていく。ヨーロッパの参照枠はどのヨーロッパの言語にも共通してそのようなペースで進めていくことができる。ところがベトナム語の場合は発音の理解が大きなウェイトを占める。声調が一番の問題でとても骨が折れる。きちんとマスターするといきなり B1、B2 ぐらいに行けるようになるという。ベトナム語がわからないので実感がないものの筆者にも印象的にはよくわかる。また田原氏もその点同感する。

つぎに文法に関してもスペイン語あるいは一般にヨーロッパの言語ではまず動詞の活用、つぎに名詞、形容詞、冠詞というように品詞別に学んでいくのが普通である。一方、ベトナム語では、そのようなカテゴリー自体が西洋語とは違うという。それよりはむしろ「用法」が中心になってくる。用法の違い、語順、接続の仕方などという違う概念でのレベルで分けおよび達成度が存在するようである。

こうして、1 年くらいかけて頑張り、何とか声調が聞き取れるようになり、自ら使えるようになると、今度はあまりカテゴリーに悩まされないでどんどん進んでいける。それゆえ一番のポイントは、A のレベルをどう設定するかが西洋語学習とは大きく分岐する点であるのではないか、というのがこの面談を終えて得られた結論であった。他の東南アジア諸語ではこの点ど

うなのかも調べてみる必要がある。結局、赤石氏の話によると、初心者にはA レベルのハードルがあまりにも高い。極限すれば、声調と語末子音をマスターすれば初級A を終えたに相応しいとの主張になる。もしそうだとすると CEFR と声調言語の整合性、あるいは A1、A2 が声調言語に適応するかどうかが問題になる。ひいては、アジア諸語の評価システムはいまわれわれが向かいあっている CEFR とはまた性格が違う体系になる可能性もあるということになる。

それでは同じアジアでも声調のないフィリピン語、インドネシア語、日本語についてはどうか、あるいは漢字の有無はどう扱うべきか、など考慮すべき他の特性も加わり、さらに複雑になる。しかし、今後そのような特性をも取り込むアジア対応評価システムを構築しなくてはならないだろう。また CEFR との矛盾点も明示的にしていかねばならないかもしれないが、どれも今後の課題となるだろう。